

■第132回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

●第1朗読 使徒言行録10・34、37～43

復活節の主日、第1朗読は使徒言行録が読まれます。この箇所では、ペトロがローマ軍のコルネリウス（百人隊長・異邦人・神を畏れる者）の家に招かれ、イエス（イザヤ書61・1）についての説教をします。イエスの公生涯は、洗礼者ヨハネよりの受洗後、救いの歴史が始まりユダヤ全土に広がります。善の行いが助けと言ひ、病や霊的な束縛のある者が、悪魔に苦しめられた人のことです。イエスは聖霊と力により、神より任命された者として、巡り歩いて……癒されたイエスの業は、彼と神が共におられたからです。彼の言動は、神の御業であり、弟子たちは、かれの生涯を直接見た証人です。イエスの十字架刑は呪われた者の死を自ら引き受けられ、(申命記21・23) 人類の罪を贖われたのです。神の救済計画の完成は、イエスの死後三日で実現し、預言（ホセア書6・2、ヨナ書1・17）と合致しています。イエスの復活後、神によって限定された証人たちに現れたのは、①イエスの復活の証人としての使命が与えられていた。(使徒10・41、使徒1・8) ②彼らによる世界宣教の計画が既に立てられていた。(ルカ24・46-48) 終末に生きている者、すでに世を去り死んだ者がイエスの前に立ち、イエスが裁き手となって私審判（ヨハネ5・22-23、ルカ16・19-31）を受けます。主は、弟子たちにこれを宣べ伝えるよう求めており、旧約の預言者もイエスの救いについて証言しています。(イザヤ書53章) 福音の核心は、イエスを信じる者はだれでも、彼を信頼してこの救い（死・復活）に与ることで罪は赦されます。

●第2朗読 1コリントへの手紙5・6～8

この箇所は次の三点について語られています。①少しのパン種（罪）でも全体を腐敗に招く恐れがある。②古いパン種（罪）の生活とは決別し、新しく生きる。③イエスを信じる者は、誠実（心）と真実（行動）に生きる。コリントの教会では罪が容認されており、パウロはこれを放置しておく、個人だけでなく教会共同体全体にも悪影響を及ぼすと警告しています。(ガラテヤ5・9、マタイ16・6) パン種（酵母・罪や偽り）は少量でも全体に悪影響を及ぼします。旧約の逾越祭での「種なしパン」は、罪のない清さを表し、これを食べます。出エジプトの際、イスラエルの民を救った犠牲の羊こそイエスであり、彼が流された血によって人類は清められたので、古い罪は取り除きなさいと勧めています。(出エジプト12章、ヨハネ1・29) 罪を取り除く実践としては、悔い改めなどによります。信者の生活としては、①主を信じる者は既に新しくされて生きており、古いパン種（罪）は捨て去り、主に倣った新しい生活をする。②悪意や邪悪な思いは捨て去り、誠実と真実（エフェソ4・22-24、コロサイ3・8-10）の両方が神と一致していることが大切で、救われた者としてふさわしく生きよ、と語られています。

●福音書朗読 ヨハネ20・1～9

週の初めの日曜日、マグダラのマリアが最初に墓に行ったのは、①イエスに悪霊を追い出していただき、(ルカ8・2) イエスの死を見届け(マルコ15・40) 埋葬の場所を知り、(マタイ27・61) 弟子たちは迫害を恐れていた。(ヨハネ20・19) ②埋葬に時間的な余裕がなく、(ヨハネ19・42) イエスの遺体に香油を塗るため墓に行く。(マルコ16・1) ③復活を最初に目撃し、復活を伝える使命は女性たちに与えられた。(ヨハネ20・17-18) 入口の墓石を動かしたのは、主の使い（天使）(マタイ28・2) です。マリアはまだ「復活」を理解しておらず、遺体は盗まれたと考えます。弟子の代表者ペトロと、イエスが愛した弟子のヨハネの二人は、イエスが葬られた墓に走って行きます。ヨハネは先に着きますが、ペトロへの配慮から、墓には入らず彼を入口で待ちます。ペトロが墓に入ると、遺体は奪われたのではなく、亜麻布がそばに置かれていた。(ヨハネ11・44) 頭を包んでいた覆いは丸めてあり、盗難ではないと考えます。空の墓を見たヨハネは、イエスが復活されたのでは、とこの体験から「信じ」始めます。このように、復活の出来事は作り話でなく、目撃された歴史的な事実を示しています。旧約の預言では、イエスが死から復活された(詩編16・10、ヨナ書2・1)とありますが、この出来事は、瞬時に理解されることはなく、夜が明けていくように、空の墓を見て、亜麻布があり、天使の証言を聞き、主との出会いを通して、弟子たちは段階的に示されていきました。

【著者の一言】イエスの時代、律法（モーセ五書）と預言者と言っており、旧約聖書の名称は、新約聖書が成立した後に生まれます。

著者 蒲池 明憲